古典的Case22　周期的な発作で衰弱した50代男性

P.D氏、56歳。3年ほど前から不調。2週間おきの発作が続いている。

その期間は、ほとんど、暗い部屋のベッドに寝た切り。

衰弱が激しく、何かちょっとしたことをするだけで弱ってしまう。

光にも音にも耐えられない。頭部は熱いが、手足は冷たい。

表情は苦しそうで、病的。発作がないときでも、不安が強く、夜は眠れない。

両手足に、震えとひきつり。

人がそばにいるのを嫌悪したが、一人でいることも恐れていた。

これらの症状は、旧来の医学、ホメオパシー、オステオパシーの治療で好転しなかった。戸外で運動することをすすめられたが、それも効果がなかった。

1919年3月18日、PD氏は、Miss.Barnard　のもとに訪れた。

綿密な診断の結果、XXX3X　に決まった。

最初2時間おきに投与した。

2~3回で改善が見られたので、3時間ごとに。

その後、1日2回、2日に1回、3日に1回と投与数を減らしたが、好転は続いた。